１月総評

今月はいつも以上に多くの投稿があった。これまでは何名かの作者に焦点を当てて評を行っていたけれども、今回は少しでも多くの方の作品を紹介したい。

左手に異なるひかり宿らせて
並行という永遠をゆく　　五味　はこ　神奈川県

左手の異なるひかりは、作中の語り手にとって決して譲れないものを表しているかのようである。だからだろうか、その永遠は宿命づけられたもののようにも見える。

こつこつと
『おてもと』のてをかに代えて
革命の日に備える岡本　　他人が見た夢の話　茨城県

革命という壮大な目的を達成するために、『おてもと』のてをかに代えるという作業をこつこつこなす岡本は滑稽で、もはやナンセンスと言ってしまいたいくらいである。それでもこの作品が心に響くのは、誰もがそんなナンセンスに立ち会うことがあるのを知っているからなのかもしれない。

ここだけの話こすもすだったのよ　　山本先生　東京都

ここだけの話ということなので、こすもすだったことは内緒なのだろうと思うけれども、本当はこすもすだったということを声高に主張したかったのかもしれない。作者のほかの作品には「一月が終わってしまうような海」や「小春ならきっと走れる足になる」といったものもあって、いずれも口語ならではのみずみずしい作品である。

卒業式帰りの市バスいつもの席　　夜　東京都

自身にとって大きな節目である卒業式の帰りでも、座るのはいつもの席。思えば卒業式のような過去との決別は人生にはよくある。失恋、親しい人が死んだとき。それでも常に

いつもの席は、そこで待っていてくれるのかもしれない。

街灯がちかちか夏の食べこぼし　　登りびと　福岡県

街灯の点滅、それを見る書き手のまなざしはどんなだったのだろう。過ぎゆく夏への感傷的な気分を表現するのに、ややもすれば晩夏や晩夏光といった季語が安易に用いられることがあるが、「夏のたべこぼし」には、それらにはない新鮮な響きがある。作者のほかの作品に「未来よりとどいた手紙ソーダ水」「ファミチキの揚げたて／雪の駐車場」「盆の月蔵書のどれも飴色に」といったものがあるが、いずれも魅力的である。

錠剤の苦味を感じるまでの雨　　あお　奈良県

苦みを感じるまでとは、どのくらいの時間なのだろう。普通なら錠剤の苦みはすぐに感じられるものだろうけれども。ここに書かれた「雨」がその時間を一瞬にも永遠にも思えるものにさせている。

「ホームセンターなんて
最初から無かったんだよ」
みたいな更地の上に月　　最上葉途　山口県

「みたいな」と書くことで、「ホームセンターなんて／最初から無かったんだよ」という言葉は、引用の言葉となる。「最初から無かったんだよ」と自身が言ったことを第三者が言ったものとして、あなたへと伝えるように。そんな客観化は、更地の上の月を少しだけやさしくするのかもしれない。

置き去りにされて日は暮れ路凍り
七味唐辛子握っていました　　小林奔　神奈川県

斎藤真一の描いた越後瞽女日記の油絵の、夕焼けの赤と雪の白が、たとえようもなく美しいのだけれど、そんな風景の断片を思い起こさせるような作品。津軽三味線の音が恋しくなる。

山下と話す田辺の声につく♯が
僕の失恋だった　　猫谷圭希　広島県

好きな人の声のトーンが明らかに変わったのだろう。飾り気のない書きぶりで、書き手の思いが直接読者に伝わる。それは「誰だっていいから傷つけたく／なってビスコを半分に割ってみる」や「鼻をかんだティッシュをゴミ箱に／放るみたいに線路へと飛んだ人」といった作品にも言える。

餡パン齧って
北海道のかたちにする　　中矢　温　東京都

幼いころ、小麦粉や砂糖、玉子を混ぜて揚げたものを母が作ってくれたが、そのでこぼこの形をみて、かじっては、恐竜みたい、魚みたい、と遊んでいたことを思い出した。書き手のなかにもそんなちいさな子どもがいるのかもしれない。

漂泊のモナドにしんと雪雑り　　吉冨　快斗　埼玉県

この作者は、作品において古いものを敢えて口語の場に持ち出すことで、新たな表現を模索しているように見える。「漂泊のモナド」というモダンな言い回しと「雪雑り」という言葉の組み合わせ。他の作品「冬至梅ほころべば耳鳴が止み」からもそうした感じを受ける。

どうしたらいいのと擦ったマッチ
にも光り　あなたはただの光りで　　白野　新潟県

光りは光りでも、あなたはただの光りとしたところに書き手の屈折があるように思う。その光りは救済からは遠いところにある。

非正規の友はうつむく
ネクタイを
しゅるりと蛇のようにほどいて　　さいう　愛知県

前月の評で、この作者の作品は生の実感をストレートに甘受していることから生まれてくるものと書いたが、その印象は変わらない。しかし、今回はその生の実感における影の部分により惹かれた。「祈りとは一種の依存／陽に近い人から／影が濃くなってゆく」、「ポプラの木みたいに／窓を抱いている／校舎」「夕映えに／ひかる両手を差し出して／／白紙のままの進路希望書」など。

怪物にも
よるごはんがある　　翠　東京都

私たちのあたりまえの風景、「よるごはん」が怪物にもあると知って、また、怪物も私たちとおなじように、あたりまえの風景を持つのだと、そしてそれが、なぜこんなに切ないのだろうと、そんなことを思わせられる作品。

世界のどこかで戦争がはじまって
それでも僕は月曜がきらい　　まちりこ　埼玉県

また一週間が始まることに対するきらいという感情は、たとえ戦争のはじまりでも解消されないに違いない。同じ作者の「割り算の寂しさに気づく女子高生」や「くっきりと世界がひかりに／包まれる／卵の殻の白さがこわい」といった作品にも惹かれた。

ムクドリは透明を抱えながら飛ぶ　　細村　星一郎　東京都

一瞬、透明を抱えながら飛ぶ痛みのようなものを感じるが、それは深読みのようにも思える。透明はどこまでも透明で、ムクドリの存在自体も消してしまいそうな気配が作品に漂う。

我が母の祖国を
シナと呼ぶ友よ
僕は冬虹
探すふりする　　長谷川柊香　宮城県

その断絶を普段感じていない側にいる者のことばが、不用意に人を傷つけることはあるけれども、それが友と思っている者のことばであったからこそ、探すふりをしなければならなかったのだろう。それでも、いつか冬虹は見つかるのだろうか。同じ作者の作品に「大寒の海までジャズを聴きにゆく」というのがあるが、ジャズを聴きに行くために、何度、大寒の海まで行かなければならないのだろうか。